

キリスト道講演会 (東京 第1回)

## 自由で活力に満ちた生き方の秘訣

2002年10月20日 (東京 YMC Aホテル)

奥田 昌道

最高裁判所判事を終えて ロングフェローの詩「人生の歌」 京都大学助手時代に入信 小池辰雄先生との出会い ゲッセマネの祈り 太陽と空気 我は上より出づ 霊の王国 一番単純な道 真理は汝を自由にする 聖霊をいただくと、どんなことになるか 神の国は一人ひとりの中に宿る

### ●最高裁判所判事を終えて

皆さん、こんにちは。遠路はるばるよく来てくださいました。

私は「京都キリスト召団」という小さな、本当に小さな集まりを昭和47年(1972年)に、40歳の時から始めて参りました。学問研究と教育という仕事のかたわら集会を持つというのは、二足の草鞋<sup>わらじ</sup>を履く生活で大変な苦勞でありました。けれども、若気の至りでしようか、そういうことを「40歳にして立つ」ということで、小池辰雄先生に励まされてスタートし、やって参りまして、今年で私は70歳ですから、ちょうど満30年ということになります。

小池先生は本当に信仰の上で恩師というしかない。先が見えなくて悩んでいた時に、一条の光となって、その光が広がって本当に目の前が明るくなった。「これぞ、本当だ!」と感じる、そういう先生との出会いがありましたのが昭和34年(1959年)のことでした。

私は1956年の夏頃に、当時は身分的には京都大学法学部の研究助手ということで論文を書かねばならない立場にいたけれども、論文どころではなく、いろいろな自分の人生の問題で悩んでいました。そのときにキリスト教に導かれた。いざキリスト教の中に入ってみると、またジャングルの中にいるようで、次から次へといろんな疑問が湧いてくる。悩みが増えてくる。そんな時に小池先生に出会った。それ以来、先生から魂の導きを受けてきました。

先生が1996年に92歳でこの世を去られたあと、東京キリスト召団新宿集会の方々が肩を寄せ合って、これからどのようなようにして小池先生亡きあとの集会を保つていくかということ、非常に試行錯誤しておられた時に、私は最高裁判所判事への就任を打診された。私は鈴鹿の田舎(鈴鹿国際大学)で骨を埋める気で隠遁しておりました時に、1999年1月20日に最高裁判所の事務総長さんから電話があつて、「こういう話を受けてくれないか」と言う。いろいろ考えた末に受けさせていただいた。私のような者で務まるかということがまず第一の心配でした。それから、



「私はささやかながら京都でキリスト召団の集会をやってきております。それは外に向かつて大々的に伝道活動をするようなものではありません。しかし、ご年配のご高齢の方も含めて、少人数の者が私の話を聞くのを楽しみにし、私と一緒に祈ることを命の支えにしている人たちの群れがいる。それを見捨てて、東京に来るわけにいきませんので、京都へしばしば帰らせていただいていたでしょうか？」

と。そういうこともお願いしましたら、「どうぞ、どうぞ」と仰っていた。それと、

「私のような者で勤まるんでしょうか？」

ということを率直に申し上げたら、「大丈夫です」と。その二つの保証をいただいたので、私は安心してお受けした。

そして、新宿集會の方へ来てみましたら、私は始め一番隅っこで——小池先生の昔の録音テープとかビデオとかを見たり聞いたりして、皆さんが祈っていらつしやるその片隅で——ひとり祈らせてもらおうと思っただけで行きましたところが、だんだんと真ん中へ引きずり出されて、皆さんと一緒に本当のメンバーになりました。新宿集會の皆さまが私を信頼してくださるようになりました。そういうことで3年半経ちました。新宿集會の方々は、

「これは天界の小池先生が奥田先生を東京へ呼んだんだ」

ということを今も信じておられる。それは誰も証明することあたわなない事柄ですけれども、私も「ひよつとしたらそうかな」というふうな思いがあります。最高裁判所の方も私を呼んでまずかつたとはどうも思っただけいらつしやらないと思っております。本当に幸いな3年半を過ごさせていただきました。私がもう裁判所の仕事があとわずかという9月に入りまして、新宿集會の方々が、

「さあ、9月の末で奥田先生が自由の身になる。伝道集會を、講演会をやりましょう」

と張り切りだして、「待つてちょうだい、早すぎるよ」と、私は困ったんですけれども、「いえ、やりましょう」ということで、それでこういう講演会を催してください。この会場が満席になるほど、皆さんお集まりになっていらつしやる。これはやはり天の力が働かなければ、こんなことは起こらない。私はそう思います。

今日の演題の、

「自由で活力に満ちた生き方の秘訣」

という題は9月の初め頃に私が申し出た題です。あまりキリスト教的な題をつけたら、それを見ただけで人は来ないから、何とか来ていただけるような題を出さねばならないと思っていました。

その当時、私の最高裁判所での生活は本当にこの講演の題名どおりだった。自由で活力に満ちて生きていた。もうゴールは近いということで、実に張り切っておりました。30代、40代の青年のごとき気持ちで、朝は代々木公園で走ってから出勤する。昼休みは秘書官とキャッチボールに興じ、対抗試合にも出ました。そんなことで、今から思いますと、よく



あんなことをやったなと思う。

「今から思いますよ」というのは、実は後日談があります。9月が終わって、京都へ帰ったら、とたんに体調を崩した。胃の調子がわるい。これは引越しの疲れだろうと思った。全身筋肉痛です。医者へ行ったら、「これは胃からきてますよ」と言われた。確かに胃が食物を受けつけない。3日くらい、お粥と梅干で過ごした。そして、10月10日にバリウム検査、15日に連絡がきて、

「潰瘍かいようの疑いがあるから胃カメラを吞んでください。胃カメラの結果によったら即刻入院ですよ」

と驚かされた。「胃カメラはいつですか?」、「18日です」と。

「私は10月20日に東京で講演会がある。これはどんなことがあっても行きます。絶対に入院しませんからね」

と言って、そこで喧嘩してた（笑）。それで18日に胃カメラの検査を受けた。検査結果は、ちよほど生牡蠣かきの姿のようなものが胃の中にポツンとできていて、

「これは見事な胃潰瘍です。今、組織検査に出したので、25日に結果が出ます。悪性ならば切らねばなりません。良性ならばそのまま年月がたてば治る。半年はおとなしくしていなさい」

「何をしてはいけませんか?」

「まず禁酒です」

と。私はよく飲みました。ランニングの会を裁判所で計画して、毎月一回、職員の皆さんと皇居の周囲を走って終わったら一緒にビールを飲む。野球が終わったらまた若い人たちと一緒に飲む。裁判所を退く9月「70歳定年退職」になると、連日お別れ会を各方面でやってください。それで飲みます、当然と思って。

「私は酒が強くなつたよ」

なんて言っていた。その祟りたた、報いたです。

「まず、禁酒。それから、ランニングはやめてくれ」

と。これは応えますね、私にとっては。

「ウォーキングなら結構です。それから、香辛料とかコーヒーとかの刺激物は避けてください」

と。考えてみたら、

「普通人の生活をしろ。70歳らしくおとなしくしておれ」

ということなんです。自分が勝手に、30代、40代と思いこんでいるところに私の過失があったのかもしれないと思います（笑）。

そんなことで、私の最高裁判所の3年半を振り返って、「楽しかったことは何か」と言われると、やはり課外活動です。昼休み時間の秘書官相手のキャッチボールなど。本格派の



ことはやらない。軟投派の投手です。

それから朝は大体、早ければ6時、遅くても6時半から、1時間は代々木公園を走ります。そこで少ない時で――1周2.5キロありますので――3周くらいすれば7.5キロ走り、さらに往復が3キロある。それから、ゆとりがある時は4周して、それで往復したら13キロを越える。それが何でもなかった。そして、風呂を浴びて、自分で食事を作って食べる。9時前になると車が迎えにきてくれる。それに乗り込んで、9時25分くらいには裁判所に入って、それから夕方まで勤務をする。

帰りますと、単身生活のときはスポーツウエアに着替えて、スーパーに買い物に行つて、自炊生活です。ありがたいことに、私はジャイアンツ・ファンでして、夜7時過ぎから自炊をやりながらテレビを見てますと、ジャイアンツの試合がやってましょ。だから、退屈や苦痛にはならなかった。今年は調子が良かったからね。

そんな生活をやつていて、一週間は完全に単身生活。日曜日に新宿集会を終えたあと、夕方に家内が京都から、京都の集会を終えて来てくれる。その来てくれたあとは、金曜日までは家内と一緒に、すべて身の回りのこと、三度の台所仕事を含めてやつてくれる。それで家内を拜んでいました、ありがたくて（笑）。金曜日に家内は先に京都へ帰つて、私は金曜日の勤務が終わつたら、新幹線で京都へ帰る。土曜日の休息の一日があつて――散髪したりとかいろいろしまして――日曜日に京都召団の集会を終えて、夕方には東京へ戻る。それから一週間また単身生活が始まる。そういうサイクルで、まあよくも規則正しくやつてきたなと思うような生活ぶりでした。そして、

「最高裁判所の仕事は激務でしょ、辛いでしょ」

「はあ、でも、私はやりがいがあります」

と。本当にやりがいがありました。今まで学者としていろいろとやつてきた。そのすべての知識・経験を全部、事件にぶつけられる。しかも事件の7割くらいは民法の問題が多い。そうすると、ワクワクしながらそれに取り組むわけです。しかし、難問が来ます。今まで見たこともないような問題が来たりする。一週間も二週間も悩むと胃が痛くなります。そういうような時にはひとり祈るしかない。それから時間を置いていただきます。

「すみません、皆さん、もう一週間待つてください。私は考えぬいてきますから」

と、延期してもらうことが何回ありました。そういう時には、私は本当に祈るしかない。祈つたからといって答えは出ません。けれども、祈ることによつて、ある時フツと何か、「あつ、こうしよう」という、ひとつの考えが自然に湧き出ることがある。そしてもう一度、事件を始めから読み直すとか、「やはりこれで行こう」というようなことを思う。よく、人から、

「奥田さん、代々木公園を走っている時に、何か答えが出るんですか？」  
なんて聞かれる。

「いや、走っている時はもう無心で走っている。代々木公園を走っている時に、そんな裁判のことも民法のことも何も考えていない。ただ美しい木々に囲まれて実に爽やかな大気の中を無心で走る。これがいいんだよ」

と。ランニングで、たくさんのお友達もできました。

それから、東京裁判所チームの野球部に入れてもらって、その方々と対外試合をやったり、研修所へ行って、研修所の司法修習生チームと野球をやったりとか、実にそういうことは私にとって楽しかった。事件の担当は苦しかったです。苦しかったけれども、全力投球でやりました。そして、9月の終わりギリギリまで事件に関与させていただいたのは本当に有り難かった。

同志社大学の方から、いわゆる法科大学院のスタッフとして、私に目をつけられた。今、法律関係の方はどの大学も大変です。司法の大改革で、司法教育制度の一環、法学教育の改革の一環として、法科大学院という、いわゆる専門の実務家の養成に直結するような大衆教育が平成16年（2004年）4月から始まるようになっています。その前から私は3年くらい、非常勤講師で同志社大学の大学院生を指導していた面もありましたので、それですんなりとお受けできました。同志社大学は、私の京都の住まいから自転車で10分で行ける所なんです。鈴鹿国際大学へは3時間以上かかりました。それに比べますと、同志社大学への通いは京都大学と同じくらいの距離になっている。京都大学への通いも私は自転車通学でした。今度は同志社大学への通いも、京都御所の周りを辿って行けば、もう同志社大学の静かなキャンパスです。そういう所で、とても私は恵まれた生活環境にあります。

裁判官を終わって、あと何もすることがないというのは寂しいことです、今まで張りつめた生活をしていたあとと何もないというのは。それは一か月やそこらは、

「ああ嬉しい、天国、天国。毎日が日曜日」

と言うかもしれないけれども、そんなものは長続きしない。

私の場合はもう10月1日からですから、ややきつかった。9月27日に退官のため皆さんに送っていただいてサヨナラをして、28日に京都へ引越しをして、30日には挨拶回りにもう一度、京都から東京へ出てきまして、10月1日に同志社大学へ出かけてまして事務手続なんかをして、2日から大学院の授業を始めました。教材なんかは夏休みに用意しておきました。2日、9日、16日と授業を行いました。それから、引越しの後片付けから始めて、いろいろな事務手続もあり、区役所だ共済組合だ何だといろいろの所で面倒な手続きも行いました。それをみんなやりました。クタクタでした。

そういうことで、「自由で活力に満ちた生き方」というのは、9月始め段階の私の気持ちをはっきり表わしている。ところが、まさか私が病に倒れるようなことは夢にも思っておりませんでした。3キロやせました。さすがに気力も萎えました。これは参ったなと思った。この講演会のパンフレットの文章を読みますと、何と書いてあるかというのと、



「これまでの人生の歩みの中でのさまざまな体験をふまえて、順境にある時も逆境にある時も……」

と書かれてある。「やられた！」と思った（笑）、私はそんなことは予想もしていなかった。逆境がやってきた。

あのバリウムというのはいやですね。しかし、あれは飲むだけだからいいが、胃カメラというのはものすごくいやです。私は初めての体験でした。胃の中はからっぽになっていなければならない、喉を通してカメラの管を入れて、パチパチ撮影して動かすものだから、喉が触られると吐き気をもよおして2回吐きました。その時、私は、

「キリストの十字架はもつと酷ひどかったはずだ。十字架のあの苦しみは大変だ。あれに比べたら、こんなのは問題でない。キリストの御名ゆえにこの程度のことは耐えるべきだ」

と。そこは「喜んで耐えよう」とまでは思わない。「耐えるべきである」と思って、わずか15分位のことですけれども耐えました。そのような、私のあるがままの生活振りでした。

東京での私の3年半半の生活を支えていたものは何かということ振り返ってみますと、やはり主イエス・キリストの御守り、御導き、力あるご愛であつたと申さざるをえません。具体的に申しますと、東京では新宿集会の兄弟姉妹たち、京都では京都キリスト召団の兄弟姉妹たちとの祈りの集会、その集会にみなぎる愛の祈り、これが支えでした。

私たちの集会は決して派手ではない。京都では私の自宅の二階座敷を集会所に使っていました。玄関入つてすぐ階段を上つて一番奥の部屋が集会所です。一階のお台所は集会の姉妹方が自由に出入りして、お茶の用意をしたり、お昼の用意をしたり、そんなふうにして家庭を解放していますと、奥さんの協力がなかったら絶対できない。奥さんが、「台所に入るべからず」と言ってしまうと、もう終わりです。けれども、私の妻が本当に協力してくれて、皆さんと仲良くして、兄弟姉妹たち、特に姉妹方とは本当に親しい間柄ですので、それで皆さん安心しておいでになる。そういう集会でした。語り手も私のような無資格者でした。

「私のような者がキリストの御言みことばを取り継いでいていいんだろうか？」と、何度も思ったことがありますけれども、しかし、最近では、私は本当に主キリストによって立てられ、語らせられているという自覚が湧いてまいりました。

小池辰雄先生ははつきり、あの1950年に強烈な聖霊のバプテスマの体験をされました。本当にもう見事に変貌された。そういう体験というものが支えであり、またそれがきっかけになって、ずいぶん聖霊の世界に深く入られました。そして、私たちに聖霊のことを語ってくださいました。私はその強烈な聖霊体験とか何とかは、見える形でしていいものから、いつもひとつの引け目がありました。



けれども、ある時、ある靈的な賜物たまもののある兄弟を通して、  
「あなたは大丈夫だよ」

という励ましの言葉がキリストの方から来た。それが1976年12月の末のことでした。その2年後に私はドイツへ留学するということになっていました。1978年から1年間、ドイツへ行くことになっていて、両親のこと、特に病弱な母のこと、そんなことが非常に気になっていた時でもありました。そのときにその兄弟を通して、ちょうどそれは夜中の3時頃でしたけれども、兄弟と語り合っていた時に、いわば天からの啓示が下ってきました。私はおったまげました。私自身は全くそういうスピリチュアルな面はない人間ですのでね。すべて他人の助け、他人を通して、そういう励ましの言葉がやってきた。それに本当に支えられたのは確かです。

### ● ロングフェローの詩「人生の歌」

ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow 1807～1882) の詩「人生の歌」(A Psalm of Life) に

Life is real! Life is earnest!

And the grave is not its goal;

“Dust thou art, to dust returnest,”

Was not spoken of the soul.

人生はリアルなものだ、真面目なものだ。

たとえ肉体は滅びて土に還ろうとも、靈魂はそうではない。

ということを書いてくれている。それから少し間を飛ばしまして、

Trust no Future, how'er pleasant!

Let the dead Past bury its dead!

未来を頼むなかれ、たとえどんなに心地よきそうでも!

死せる過去をして、過去は過去をして葬らせよ!

これは「死人を葬ることは死人に任せよ」という聖書の有名なところからきている。過去を葬るのは過去に任しておけ。過去にとらわれるな。さりとて、未来に淡い希望をいだいて、それによりかかって現在が空虚であつてはいけない。むしろ現在こそが大事だ。現在を本当に充実して生きろと。

Act, — act in the living Present!

Heart within, and God o'erhead!

行動だ、行動することだ、生きている現在に!

内にはハートを、頭上には神をいただいで!

これがクリスチャンであるロングフェローの真骨頂です。私にはそれがなかった。神を敬う思いはありました。でも、明確に、



「これが神である。これが救い主だ」

という、そういうものはありませんでした。これは私が高校時代からロマンチストであるとともに、常に非常に儂い無常観をいだいていたためと思う。悠久なる大自然に比べて、自分は何と儂い存在であろうか。私は山が好きだから、山登りに行きます。本当に感動するけれども、感動を越えて讚美はこない。その偉大なる素晴らしい山、大空、大自然に比べて、

「お前はなんと儂いちっぽけな人間なんだ。お前は何者なのだ？」

と。そういうふうには、悲しくなってしまう。一緒に登っている山登りの友達も、みな喜んで喜々としている。

「この人たちはおかしいのではないか？」

と私は思いました。向こうから言つと、

「あいつは何たるペシミスト（悲観論者、厭世家）か」

と語っているに違いない。そんなことで私は高校の時から非常にロマンチストで、愛に飢え渴いていた人間でもありました。もちろん異性への愛です。そういう時を過ごしていた。

Lives of great men all remind us

We can make our lives sublime,

And, departing, leave behind us

Footprints on the sands of time;—

偉大なる人々の人生はすべて我々に思い起こさせてくれる、

我々は我々の人生を崇高なものにすることができると。

あの内村鑑三は『後世への最大遺物』という書物の中で、伝道も含め、学問も含め、いろんな事業をあげてきて、こういったものはそれぞれ素晴らしいけれども、誰でもがやれることではないと。

「誰でもが万人が後世に遺せる最大の遺物は何か。それは、『勇ましい高尚なる生涯』である」

と語っておられます。後世への最大遺物。それにこの言葉が似ていると思います。

偉大な人々の人生というのは、みな我々に我々自身が、我々の人生を崇高ならしめることができる、ということをお思い起こさせてくれる。

そして、世を去るにあたって、我々の後ろに、時という砂の上に足跡を残して  
いける。

Footprints, that perhaps another,

Sailing o'er life's solemn main,

A forlorn and shipwrecked brother,

Seeing, shall take heart again.





どんな足跡か。それは他の人が人生の厳かな大海を航海しつつ、  
孤独で難破したとしても元気づけられるものだ。

つまり、心破れた兄弟はその足跡を見て、再び元気をとりもどすに違いのような、そんな足跡を君は残していけるんだよという励ましの言葉です。だから、さあ元気を出そうと。

Let us, then, be up and doing,

With a heart for any fate;

Still achieving, still pursuing,

Learn to labour and to wait.

いかなる人間にも暖かいハートをもって、

成し遂げつつ、努力しつつ、なお追究しつつ、

そういった待つということを学ぼうではないか。

そして、思いきり働き、そして、あとは天からの報いを待つといいでしょうか。高校時代はこのような心境にあこがれながら、自分はとうていこういう心境にはなれないということとで悩みました。大学へ行ってからもそうです。大学時代も、私は自分の内面生活を省みますと、結局突き詰めれば、やはり罪という問題、死という問題、この二つにぶつかっていたのだと思います、気付かずして。

### ●京都大学助手時代に入信

罪というのはやはり、良心の呵責かしゃくですね。

「自分の欲する善はこれをなさず、欲せざる悪これをなす。ああ、われ悩める人なるかな。心では善を願いながら、やっていることは全く正反対のことをやっている。しかも、そこから脱出できない。」

とパウロはローマ書7章というところで自分の姿を見て苦しんでいる。

この死のからだ、この死せる我、ここから救い出してくれる人は誰なのか。

それはキリストだ。主イエス・キリストに感謝する。彼はそこから私を贖い

出してくださった。」（ロマ7：19～25）

と叫んでいる。そして、あのローマ書8章へいきまして、

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。キリス

ト・イエスに在る生命いのちの御霊みたまの法のりは汝を罪と死との法より解放したればな

り。」（ロマ8：1）

と。そういう勝利の宣言がくる。私にはそんな宣言はありませんから、とにかくその罪のことで本当に悩みました。それから、もう一つは愛の問題です。異性への愛というのは、追いかけても得られるものではない。押しつけるものでもない。そして、自分がそれを失うのではないかという、絶えず不安感がつきまとう。では、そんな愛はもう捨ててしまえ



と思う。でも、愛がなければ空しいでしょう。やはり、そこに執着する。

「相手を愛するというのは結局、自分を愛していることになる。自分ゆえに相手を愛している。相手のゆえに相手を愛していない。本当の無償の愛に徹していない」

ということに気づきました。自分の中のエゴというものに気付いて、苦しんできました。

それから、大学を卒業して学問の道に進みました。しばらくは、一生懸命にやっていたけれども、修道院みたいな赤煉瓦の薄暗い部屋の中で朝から晩まで独り、電灯のもとでドイツ語の本と首つ引き。それで何十日も過ごしていますと、だんだん己が空しくなってくる。何か月か経ったころ、

「お前は何者だ？ お前はそうやって無心に本を読んだり、学問をしたりと、けなげではある。しかし、何のためにそんなことをやっているのか。お前自身は何なのだ？」

という声私を苦しめて離さない。それまで、学生時代は周りに友達もいますし、司法試験を目指してやっていますから、そんな声が聞こえてくることはなかった。来る日も来る日も課題がありますから、それにとにかくかじりついていないといけない。私は一発で通らなければ——私の家庭というか家族の経済状態が許さない——だから、絶対に一発で通るといふことで、それは猛烈にやりました。でも、研究室に残って、独りぼつちで朝から晩まで研究をやっていますと今度は、自分というものを見つめてしまう。それで私は困って、

「いったい法律学なんて何のためにやるのか？ ドイツ民法を何のために勉強するのか？」

と。19世紀のドイツ民法の前の時代の法律をコツコツ勉強しようとして、恩師に勧められてやっている。恩師の方はちゃんと自分で見取り図があつて、位置づけができているから、「これをやれ」と言うんですけれども、「何ゆえに」ということは教えてくれない。「これをやれ。文句を言わんで、ただやれ」と、それだけ。昔のお師匠の指導というのはそんなもんです。その頃はマルクス主義が盛んなりし頃、学生運動が盛んなりし頃です。私は周りから雑音が聞こえてくる。

「奥田君、そんな法律学なんてやっていて何になるのか。法律学は人民を搾取するための道具ですよ、そんな人民を搾取する学問に奉仕して良心が許すんですか？」

と言って責めてくる。私は恩師の所へ行って、そういう問題をぶつけたら、「資本論くらい読みたまえ」と言われた。それで『資本論』を買ってきて読んだ。とうとうある日、たまらなくなつて、

「何のために学問をやるんですか？ 何のために民法を勉強するんですか、国民の幸せのためですか、人民のためですか？」

と言ったら、怒られましたね。

「もし、何のためにと、そんなことを先に答えを出してからしか勉強できないよう



だったら、学問を即刻やめなさい。学問のための学問だ」

と言われた。「芸術のための芸術」という言葉がありますが、私の恩師は心から「学問のための学問」を信じておられた。だから、

「何のためとか、目的手段ではない。学問それ自体に無心に埋没できないような者は学問する資格はない。少なくとも俺の弟子ではない。お前を見損なつた。人生の問題を切り込んできても、そんなのは俺の答えるべき問題ではない。そんなのは俺の答えるべき領域にあらす。ただ無心に学問しろ」

と言わんばかりに、突きはなされた。私の恩師はどうやって学問するのか聞いてみた。

「先生、学問は楽しいですか？」

「苦しさの連続だった」

「僕はドイツ語が好きなんです」

「好きだ嫌いだと言つてやれる間はいいよな」

と言われた。その先生は若い時に、夜10時まで勉強して、そのあと京都四条の酒場街に出て行つて深夜の2時頃まで飲んで、その後下宿に帰つてきて、また朝、大学に出て来てひたすら学問する。

「酒と学問しか興味のない人なんですよ」

と、奥さまに言わせたら、そういうお師匠なんですな(笑)。それで、参つたわけです。もうこの先生は相手になつてくれない。捨てられたと思つて、悶々としていた。

ある時、夏休み前に、ローマ法の研究会の懇親会のあとで、キリスト教の兄貴分がその場にいた。彼は本当に純粋なキリスト信者で、燃えていました。その彼に悩みを打ち明けた。7月7日の夜です。京都大学の構内をずっと3時間くらいぶらぶら歩いたり座つたりした。彼は熱烈にキリストを話してくれた。月明かりに見る彼の顔は天使のように輝いていた。「これは参つた!」と思つた。僕は確かに歴史上のキリストやその伝説について知っているけれども、キリストとまともに向き合つたことはなかった。ところが、彼はキリストそのものを生きて、キリストに信じきつて、キリストの平安が、喜びが顔に表れている。あとから聞いたら、「その頃が一番燃えていた」と言つていた。

彼は私を導いて2か月たったたら、アメリカからきた若い宣教師の誘いを受けて、大学院を捨て去つて、伝道者の道に行つてしまった。あとからまた京都には戻つてきたけれども。伝道者として聖書に取り組むという生涯は変わらず、学問には戻らなかつた。結局そのあと紆余曲折を経て、聖書研究の第一線にいます。彼が私を導いてくれた恩人で、その集會はフィンランドの宣教師たちがやつていた教会で、熱烈なんです。「ファンダメンタリズム」(Fundamentalism 原理主義)と言ひまして、聖書の文字は、旧約聖書から新約聖書まで一言一句全部、神の靈感によつて書かれていると信じている人たちです。

私は救われて喜んではいる。今までの荒野からキリストの中に入れてもらつて喜んでい



るけれども、聖書を開いてみたら、疑問に思うことばかりでしょ。創世記から始まって、それを宣教師は、

「これは科学的真理そのものです。神は七日で万物を造られた。そのとおりです」と言うんですから、まあそれは驚きますよね。ことほどそのように、

「すべてあそこに出ていることは全部、歴史的眞実である」

とか言う。そして、日本の文化に対する理解がまるでない。

「日本の宗教は全部邪教だ。キリスト教だけが正しい」

と。それで私は辟易へきえきしまして、「これはたまらん」と思いました。しかしながら、キリストに救われた喜びがあります。だから、悶々もんもんとしながら、その教会には集ってはいた。確かにキリストに出会った喜び、キリストに従う喜び、それはあります。けれども、いろんな問題が未解決です。科学と宗教の関係でしょ、学問と宗教の問題もある。私の恩師は言うんです、

「学問する人は無宗教でないといけない」

と。それが、

「私はキリスト信者になりました」

と、ある時、報告に行った。おまけに、その教派は禁酒禁煙でしたから、

「私はお酒も飲みません」

「そうか、奥田君。酒を飲まんのは君の自由だよ。ただしね、酒飲みの心がわからんようでは、人は救えんよな」

と言われた。それから、「キリスト信者になりました」と言うと、

「それはよかったね、けれども、本来、学問をやる人は無宗教でないといかん。何ものにも囚われてはいかん。本当に無心の境地で学問にとつくめ」

と仰った。そういうご叱咤しつたと思う。それが証拠に、何年もたちましてから、私の若い弟子に、「奥田君は良かったよ。彼はキリストによって救われた。非常に落ち着いて学問に取っ組んでいる。彼にはよかった」

と。つまり、方向が定まったというか、精神的に安定した。そういうふうに漏らされたというから、安心した。そういうお師匠さんでした。禅坊主みたいな方でした。

そんなことで、学問と宗教の問題というのは大変な問題でしょ。それから、法律と宗教です。宣教師は言いますよ、

「離婚なんか絶対にいけません」

「何ですか?」

「聖書に書いてある。離婚法なんて全部間違ってます。正しなさい」

と、こうくるわけです。要するに、高次の倫理で語られている世界と、この世の本当のときのわるい人間どもの集団の中で妥当する法理というものをごっちゃにして、一元的にし

か理解しないという偏った<sup>かたよ</sup>キリスト教です。そんなものでやられたならば、たまったものではない。重層構造になつていることがわからない。私たちは割合そこに自由自在にいますと、「お前は妥協している」と、こうくるわけです。そういう経験をされた方が他にもいらつしやると思います。何も私は、宣教師個人々人を責める気はない。そういうひとつのドグマ(教義、独断)に縛られていることに対して、私は「ノー」を言っている。そういうものが宗教を狭くし、他宗を排撃し、宗教戦争を引き起こすと思う。本当に無色透明、本当の真理の光が一切を照らすという、そういう広大無辺さに至らなければ本当の魂はやりきれない。

### ●小池辰雄先生との出会い

そのように、私は呻きながら求めていましたときに、小池辰雄先生に出会った。1959年の秋でした。私は京都大学でドイツ文学会があつた時に先生をお招きして、京大生のために講演をしていただいた。先生のお話は実に自由自在なんですよ。「こんなのがあるのかな!」というくらいに自由自在さ。そして、本当に「目から鱗<sup>うろこ</sup>」というのはいふことだと思えました。「これなら私もついて行ける。これぞ私の求めていたもの」と思った。先生は言われました。

「皆さん、キリスト教を信じたら、世間が狭くなる、視野が狭くなると仰いますけれども、それは反対です。本当に囚われない曇りなき目でみれば、どんどん広がります。」

文化文明というこの世の営み、理性的な営み、芸術の活動、それらはすべて天に向かつて伸びていく。しかし、それが伸びていくには、目に見えない根っこというものがある。根っこは、上に伸びていく樹木の高さと同じだけ地中に根をおろし、根を張つていく。この根がしっかりしていなかったら、上の樹木は成り立たない。

根は見えないだけです。宗教の世界、神さまに向かう世界と、それから理性的な営み、この地上での営み、これとは正に営む方向は正反対だ。しかし、それは一本の線で貫かれていなければならない。根っこが腐っている文化文明は必ず滅びる」

と言われた。僕は、「なるほどー!」と思った。それで、僕はこの先生に、

「私は法学をやつてきて、本当にキリスト教の真理と、学問的な――しかも法律学という社会科学の――真理がどこでどう繋がるのかわかりません。二足の草鞋<sup>わらじ</sup>を履くことではないでしょうか?」

と質問した。

「奥田君、今はいろいろわからないことがあるだろうけれども、心配しないで、今



のまま進みなさい。ルターだって、大学教授として貫いたんだから」と。ルターと私は立場が違いますけれども、向こうは神学だからいいけれども、法律学という俗世間の学問でしょ。

「方向が違うんだ。本当に君が根っこを深く深く、キリストを求めていけば、何かこの地上での、そういう理性の営み、働きの中にきつと何か跳ね返ってくるから。直接に宗教の世界を、根っこの世界を、この文化の世界に適用するのではない。直接ではない。間接だ。君という人間を通して、君の日々の生活の中から何か生まれ出てくるかもしれないよ」

と、そういうことを仰つてくださった。私は「それで行こう!」と思った。だいいち、

「24歳で私はいつペン死んだ」

という思いだった。本当にお先真つ暗で、朝は辛くて朝起きた時にもう辛い。「また一日が始まるのか」という重い足どりで研究室へ行っていた。そういうどん詰まり、行き詰まりの状態。体はほとんど三日に一回、保健診療所へ行つて薬をもらつて対処するという生活でした。そこから引き離されたものですから、もう私はあそこで一旦、死んだと思つていきますから、その後はどうなつたつていいと思つた。よくお袋を悲しませました。

「私は正直なところキリストを信じて、これからは私の人生は私の人生で、今は一応学者であつて助教授の身分だけでも、キリストが来いと言われたら、いつでもこれを捨てて、伝道者であろうと何であろうとも、どこへでも、どういう仕事でも喜んでつく。ただ、軽拳妄動もうどうはしない。はつきりと御声を聞くまでは、今の仕事を天職と思つてやる。だから、お母さん、安心して!」

と言つたら、母はあとで、

「あの子、職を捨ててどこかへ行つてしまうのではないかと、随分心配した」

と言つた。親不孝なことをしました。そのくらい私は一途いちぢずでした。

それで、小池先生にふれて、広くなつたんですね。そして、学問と宗教とか、社会と宗教とか、その他諸々の外なる問題はもう気にならなくなった。あとは自分の内側の問題だけ。これはそう簡単にかかない。というのはいはり、

「キリストは十字架で、私の罪を赦してください」

と。これはクリスチャンなら誰でもどの牧師さんも仰います。でも、教会で私が聞いてきたことは、

「だから、これからあなたはしっかり神の子らしく正しく真つ直ぐに生きなさい。

もう罪を犯してはいけません」

と。これが困るんです。そんなに人間はいつぱんに変わらないですよ。

「昨日までのことは赦してあげた。しかし、これからは自分で責任をもつて生きな  
なう」



と言われたら、くる日もくる日も変わらないでしょ。そうすると、毎晩毎晩、懺悔ざんげしないといかんでしょ。辛くてしょうがないですよ。そういうことで悶々もんもんとしていた。そして、「あなたはクリスチャンですから、世間の人々が皆あなたを見えます。あなたがへまをやれば、神の栄光がけなされます。語ることに、すること、全部、神の栄光があなたの一挙手一投足にかかっています。責任とりなさい」

なんて言われたら、もう世間を歩けないですよ、何かへまするのではないかと思って。それで私は辛かった。私はまたノイローゼになった。そういう悶々もんもんとしていたことがしばらく続いた。

小池先生は自由自在にやっている。私は

「どうしてこんなふうになるのだろうか。いや、私は私で行かねばならない」  
と思っけていますから、それで悶々もんもんとしていた。

それが数年経ってから、小池先生は、

「このキリストの十字架はあなたの全存在、過去・現在・未来の全存在を根底から贖あがないきっている。あなたは完全に解決されている」

ということを抑っている。それが私の中に入ってきて、本当にある時——これはドイツに留学していた時です——夜明けの3時頃でしたか、ひとり悶々もんもんとして、祈るでもなしに考え込んでいた時に、ウワツと迫ってきた。

「どう転ころんだって、あなたは救われっこないんだよ。どう転んだって、絶対、先は開けない。私の前にぶつつぶれたらどうだ。あなた自身を投げ出したらどうだ。

あなたの全存在を私が責任をもつ。あなたは無責任でいい」  
と、そういう迫りを感じた。「これだ!」と思った。

内村鑑三は「江戸城明け渡し」ということを言われました。あの方はもの凄く悩んだ。ありとあらゆることをやってみた。アメリカへも行って、皿洗いもし、靴磨きもし、いろんな所で働いて、看護師もやってみたりした。それでも平安が来ないというので、とうとう疲れ果てて、アマースト大学のシーリー総長の所へ相談に行った。そしたら、

「内村君、君は自分を見過ぎるね。キリストを抑おさぎなさい」  
と言われた。それで内村鑑三は、

「そうだ、キリストはすべてを私に代わってなしてあげてくれた。私は何一つしなく  
ていい」

と、そこに気がついた。

それは『基督信徒のなぐさめ』のあとの『求安録きゆうあんろく』——平安を求めている悩みの戦い——という本に書いてあります。それを私はドイツで一生懸命に読んだ。その内村鑑三の気持ちがあわかった。彼はそのキリストに委ねきつたあとにきた平安、喜び、それをあたかも「江戸城明け渡しえどぎやまきわしの如し」と言った。今まで徳川幕府が自分でグツと権力を握って、「これは絶



対に離さない」という、つまり「我なる主権」を握っていた。それを全部明け渡して、すつからかんになった。その時に本当に支配すべきお方が君臨して支配してくれて、そこに平安がきたという譬えで言っておられる。私もそうだった。本当に完全に降参して明け渡した。「主さま、もうどうにでもしてください。もう私はこれで終わりです。一切、義理立てしません。他人が何と言おうと、自分の良心が何と責めようと、もうどうしようもありません。助けてください」

という、無条件降伏です。それが一つの出発点になったと思います。それからなお紆余曲折がありましたけれども、私はやはりそこで一皮剥けて、それでも絶対帰依という、そこへ行くこと。ちょうど、親鸞の歎異抄にある、

「弥陀の本願に助けられて、もう善人どころか、悪人が救いの正因である」

という。善なるが故に救い給うのではなく、悪人だからこそお前を救わずにはいられないというのが弥陀の本願である。その本願の力によってお前は救われるという。キリストという絶対なる者が私を取つかまえて離さない。

「あなたが私を信ずるのではない。私があなたをつかまえて離さない。あなたは私の中にいる。それでいいんだ」

と。ちょうど、ドイツに行った時に、パウラーという彫刻家の彫刻が学生寮に置いてあった。そこに言葉が書いてあって、

“Ich habe keinen Gott. Aber Gott hat mich.”

「私は神を持たない。しかし、神は私をつかまえてありたもう」

と、そういう言葉があった。

「私は神を持ってません、神をつかまえてはいません。しかし、神さまの方は私をつかまえて離したまわない」

と。この転換。コロンスの卵か、それとも天動説から地動説への転換か。そういう、「こつちからつかまえよう、御意にかなおう、いいクリスチャンになろう、自分が善行して神さまに喜ばれよう、こつちから一生懸命に這い上がるう」

としていた。それが間違っていた。

「あなたの全存在が既に片付けられている。罪というのは、存在そのものが罪なんだよ」

と。小池先生は言ってくれました。これはショックでしたね。

「存在そのものが罪だ」

と言われたら、それこそ行き場がなくなる。

「生きていることが悪い。生まれてきてすみません」

と太宰治みたいに言わないとならんでしょ。でも、小池先生は、「自我、それが罪だ」と言われた。大学では、





「自我を確立せよ、自我のない人間になるな」

と言っているでしょ。ところが、

「自我、それが罪だ。神さまの前に己を立てる、それが罪だ。人間は生まれながらにして、みんなそれだ」

と言われた。赤ちゃんの時は知りませんが、もの心ついた時から全部、己を立てる。己をそのままにした上で、神を求め、善行を積み重ね、徳を積もうとしている。ところが、

「根底の自我という、神に逆らう在り方、そのものが実は罪の罪たる所以<sup>ゆえん</sup>だ」

と、小池先生は語られた。そんなことは普通のキリスト教の本に書いてないように思う。

「罪を悔い改めなさい。あなたは心の中にこういうことを思ってたでしょ。あの時こんなことを言ったでしょ。誰々をこんなふうにいじめたでしょ。それをずうっと小さい時から全部思い起こして、全部書き留めて、悔い改めなさい。これからはもうしてはいけません」

と、こういうことは何度となく聞かされたけれども。でも、

「存在そのものが罪だ」

と言われたら、人間の全否定ですよ、全人格的否定です。小池先生はそれだと言う。

「キリストはどういう方かというのと、彼は自我がなかった。イエスはまぎれもない人間だ。我々と同じ心を持ち、ハートを持った、悲しみも痛みも全部わかる人間だ。

罪の誘惑にもさらされた。しかし、彼は罪を犯す可能性はあつたけれども、現実にはならなかった。キリストはどんな人か。彼は絶えず父の懐に祈りこんでいた、

『父よ』と」

未だかつて神さまのことを「父よ」と言ったのはキリストだけです、旧約聖書からずっと見ても。

「父よ、あなたの御意<sup>みこころ</sup>をなさせてください。私はあなたに投げ出しています」

と。だから、ある時、富める青年が、

「善き先生、どうしたら永遠の生命が得られますか？」

と聞いてきたら、イエスは

「なぜ、私のことを善き先生と言うか。善き方はただひとり、父のみだ」

と。それから十誡の話をされた。青年は、

「全部、私は守ってきました」

「いや、お前はまだ一つ足りないね」

「何ですか？」

「お前は金持ちだ。持ち物を全部売り払って、貧しい人に施して、私の弟子になつて従つてきなさい」

とイエスは言われた。



「青年は悲しげな面持ちで立ち去った。イエスは慈しみの目でその青年を見ておられた」

とルカ伝に書いています。小池先生は言われた、

「富を持つていることが何ものかではない。富に執着している己、これが問題だ」となるほどと思つた。つまり、イエスはその富める青年において、

「一番大事なこれだけは失いたくないという、しがみついているものを捨てよ」と言われた。そこで、青年が、

「参りました！ 私は捨てられません。罪深き私を哀れんでください」

と、そこで降参したら、

「いいんだ、いいんだよ。富なんか捨てなくてもいい。気付いたらいい。人間、捨てられるものか。私がお前を、捨てられるような人間に変えてあげるから、大丈夫だよ」

と。これが小池先生においてはキリストの十字架だった。

### ●ゲッセマネの祈り

十字架にかかる必要の全くないイエスというお方は神を一切として、

「私は神の言葉を取り次いでいるだけで、私は自ら何も教えられない。自ら何もしていない。すべて神が私の中で御業をなさっているだけだ」

と。御意だけを求めて生き抜いた。これが「義人」です。この義人にわざわざ、

「お前は十字架にかかれ」

と神さまの無茶苦茶な命令がなされた。それでイエスはゲッセマネで苦しんで祈られた。

「他に道がないんですか。どうしても人々を救うためにこれしかないのですしたら、私はお従いしますけれども。あなたは全知全能のお方、きっと他に方法をお持ち

でしよう？」

と言つて苦しまれたのが、私はゲッセマネのあの祈りだと思う。

「額から落ちる汗は血のしずくのごとし。天使がきて助けた」

と書いてある。何も自分の命が惜しくて苦しまれたのではない。キリストは今まで父なる神と蜜月、一つです。離れたことはないんです。

「父よ！」

と言えば、神はキリストの中に充満している。

「わが心なり、清まれ！」

と言つたら、サツと清まる。

「癒えよ！」

と言つたら、サツと癒える。



「父は、私の中で御業をなさっている」

と。全部、きたるべき天国の徴を見せられた。そういう父一切で生きてきたキリストはいまや、父との愛の結合を引き裂かれようとしている。それが十字架だった。

「何ゆえですか?」

「お前はこれだけ3年間伝道した。神の国のことを語った。敵対者が出てくるばかりだ」

と。ヨハネ伝の中にもユダヤ人との問答がある。キリストは何一つ悪いことはなさっていない。神の言葉を告げているだけである。ところが、ユダヤ人はそのキリストを殺そうとした。

結局、人はもともと、神の子であったのに、いつのまにかサタンという、己を立てる、神に逆らう親玉の子分になっている。それに操られているから、キリストがやってきたら、逆らうわけです。気付かずしてそうやっている。今だってそうです。人が本当に神から出たものだったら、神の言葉に従うはずです。神を喜ぶはず。ところが、従えない。光がきたのに闇を喜ぶという在り方はやはり、その魂が本物から外れて、あらぬものの支配下にあるということになります。それをキリストは奴隷と言われた。

「罪を犯す者は罪の奴隷なり」

と。ということとは結局、自我という、己を神の前に立てるといふ、そういうものの束縛の中にあつて不自由だ。それが死なんですね、そのあとは。

「それを解決するには、もうお前が身代わりになって、死んで解決するしかない」といふのがゲッセマネの祈りにおける神の命令です。イザヤ書53章にもちゃんと啓示されている。

「彼は我々の罪を背負い、我々の病を負った。彼は神に打たれて叩かれたと我々は思った。しかし、神は我々すべての不義を彼の上に置かれた。彼はそれを負って、黙って死んだ」

と書いてある。そういうことに気付いたら、これはたまらん。どうしてこの根源の真理を、皆さん、気付いてくださらないか。キリストは何一つお返しを求めていない。黙って十字架についた。

「父よ、彼らを赦したまえ。彼らは自分のやっていることがわからないのです」と祈られた。山上の垂訓で、

「敵のために祈れ」

と仰った。それをキリストは自分でやっておられる。弟子たちが剣をぬいて反抗しようとしたら、

「剣をおさめろ。剣をとる者は剣で滅びる。私が捕らえられて十字架にかかるのは、聖旨だからだ。聖旨を妨げてはならない」



と。キリストは一つも武力や暴力を使わない。御意みこころだけに従った。そして十字架にかかった。「わがこと終われり」

と。この十字架がご自分のためではなくて、私というエゴなる私を、エゴなる一人びとりを全部ひっかぶって、解決してしまつた。もはや、全部片づいた。

そして、朝が来た。キリストが霊体となつて現れてきたのが復活でしょ。そして、天界へ昇られた。今度は、弟子たちに火となつて下つてきたのがペンテコステです。聖霊を受けて弟子たちは雄々しく立ち上がりました。聖書の「使徒行伝」というところに書かれている。ヨハネもペテロもパウロも見違えるように変わった。パウロなんかは始めはパリサイ人びとで、キリストを迫害する急先鋒でした。それをキリストは引っくり返した。そして用い給うた。

だから、ヨハネ、ペテロ、パウロといった人たちの書簡に書いてあることや、キリストが福音書で語られたことが、私の中に今、燃えて親しく感じられます、言葉が、聖言みことばが。この気持ちは本当に「リアル」(real 現実)なこと、で、「アーネスト」(earnest 真面目なもの)です。

## ●太陽と空気

私はキリストをどんな方だと思つているかというところ、これは太陽と同じです。天界の太陽を、皆さん、瞑想してください。太陽は雲の彼方に今日も照つてますよ。私がドイツに行つた時にも太陽が照つていました。

「ああ、この太陽は日本を照らしている太陽と同じだな」

と思つた。まことに地球のありとあらゆる所を見ても、太陽は万物を照らし、万物を生かしています。もし太陽がなくなつたら、地球は冷たくなつて、とうに滅びています。太陽という存在が地球を引力で引っ張つて、地球は太陽の周りをグルグル回っています。日本はありがたいことに春夏秋冬という季節があり、美しい国です。日本人はまさに「日の本の民もつと」で、太陽と一緒に日本民族は生活してきた。だいたい、ご年配の方は朝起きたら、お日さまに向かつて拜んでおられます。太陽と一緒に目覚め、働き、そして太陽が没すると、家に帰つて、夜なべをして休む。そういう実に健やかな生活をしている。そして、日本は水が豊かで、「豊葦原とよあしはらの瑞穂みずほの国」と言われた。そういう自然な、争いの少ない、本当に「大和たいわ」というにふさわしい大和民族やまとであつた。太陽と一緒に生きてきた。

その太陽は自然界の太陽ですけども、まさにキリストというお方は霊界の太陽だと、私は思つている。「何々教」なんていう、そんな枠は外して考えていただきたい。天界の太陽を、自然の太陽を誰も限定しようとしなさい。「これは日本のものだ」なんて誰も言わない。全世界の人々のもので、全世界の人々はこの太陽の恵みで生きています。霊界の生命の源であるキリストという太陽から生命をいただいて生きて、万人が生きて、何の不足があるんですか。何々教だつていい。それぞれが自分の信ずる宗教——禅宗だつていいし、親鸞さんでもいい、神道でもいい——それら一切を包んで、本当に根源の光を照らしてくれて、無理やり「キ



リストを信じろ」とは仰らない。

「私を受けとれ。私の生命を受けとってほしい。そのために私は十字架にかかった。その生命をあなたに上げたい。あなたの所へ飛んで行って、あなたに生命を上げたい」

と、これがキリストの呻きなんです。決して、

「キリスト教化しよう。植民地にしよう」

とか、そんなことをキリストが思われるはずがない。だから、私は「霊的人格キリスト」と言います。いわゆる「キリスト教」のことを私は言わない。よく人は言うんです、

「キリスト教は罪を犯している。植民地支配をやってきた。戦争ばかりやってきた。

一神教はろくなことがない」

と、宗教評論家はすぐそういうことを言う。それに対して私は、

「ああ、そうですか。私は(キリスト教には)関係ありません。私は霊的人格キリスト、この方を本当に恩師として、救い主として、じかじかの導きを受けている。この方とならどこへ行つたつて構わないんです。運命共同体ですから」

と。本当に一人びとりの中に宿り給うキリスト、無条件に宿り給うキリスト、何も代価を求められないキリスト。そのキリストが与える愛は無代価です。

空気は無代価で、皆さん、吸っていらつしゃいますね。お気づきにならないけれども、この部屋の中に空気がなかったら、窒息なさいます。外へ出たら、気持ちがいい。新鮮な空気を吸っていますから。寝ている時も空気を吸っています。生きています。けれども、皆さんは空気を吸っていることを意識なさらない。キリストの霊気、キリストの霊の生命、これは来ているんです。もう神さまの方から送られてきている。皆さんは無意識に吸っている。霊の呼吸をなされば吸える。

何も条件は要らない。小池先生が私どもに語ってくださったことで、いろいろ素晴らしき言葉がある。たとえば、「無条件」ということ。

「条件の付いたものは最後のものではない」

と仰った。条件付きのものではない。空気はそんな条件がない。ダイヤモンドがどんなに高価であっても、空気がなかったら、ダイヤモンドだけでは生きていけない。空気、それから太陽の光、それから水です。昔は、水はただでした。井戸を掘れば水が湧いてきた。ポンプで冷たい水が出てきた。そういう時代が我々の時にもあった。今はペットボトルに入れて買わなければならないようになってしまったけれども、これはみな人間のなせる業ですから。神さまが悪いのではなくて、人間が悪い。だから、考えてみたら、我々の先祖たちが生きていた時代というのは素朴ですよ。素朴ですけども、太陽の恵みの中に生き、自然の恵みの中に生き、光を浴び、空気を吸い、美しい水によって作物が生かされ、そして動物たちと一緒に暮らしていた。コケッコと鶏が啼いて、卵を産んでくれたと



いう、実にのどかな時代でした。もちろん文化文明が進みますと、そういう時代はいつまでも続かないけれども、我々の先祖たちはそういう心を大事にして、

「米粒一つにも神さま、仏さまが宿っている」

と言ってくれた、そういう先祖の心があったわけです。一粒一粒が汗と労働の結晶ですもの。あだやおろそかにできません。

### ●我は上より出づ

そういう心を大事にする。そういう生活をとり戻さなければいけない。それは私にとつては、この福音書、新約聖書——私のは一冊の小型の「文語訳新約聖書詩篇付き」という昔の古いもの——これを本当に手離さず、熟読玩味してます。私の栄養分です。

ヨハネ伝をちよつと見てみましょう。8章の所、これは一つのサンプルにすぎません。ヨハネ伝というのは、日本人が読むのに最もふさわしい福音書だと思う。それからルカ伝です。マタイ伝では「山上の垂訓」なんかは素晴らしい福音書だとも、その他のところはどうしてもユダヤ人を相手にして書かれていますから、「旧約ではこうで、新約ではこうで……」とか、パリサイ人との問答がいろいろ出てきて、若干ややこしい。その点、ヨハネ伝は非常に我々の気持ちにピッタリするような福音書だと思う。そのヨハネ伝8章の所を読んでいきます。キリストが、

「私はいつも父と一緒にいるよ」

というように言われた。

「<sup>19</sup>ここに彼ら言う『なんじの父は何処にあるか』イエス答え給う『なんじらは我をも我が父をも知らず、我を知りしならば、我が父をも知りしならん』<sup>20</sup> イエス宮の内にて教えし時、これらの事を賽銭函の傍らにて語り給いしが、彼の時いまだ到らぬ故に、誰も捕うる者なかりき。<sup>21</sup>かくてまた人々に言い給う『われ往く、なんじら我を尋ねん。されど己が罪のうちに死なん、わが往くところに汝ら来ること能わず』」

これは明らかに十字架の死を指しておられます。

「私はもう十字架を通って父のみもとに行ってしまう。それから私を捜したつてもう遅い。あなたの方が心を頑なに<sup>かたく</sup>して、心を閉ざして、私が神から遣わされた、あなた方にとって本当の救いの源<sup>みなもと</sup>だということを受けとれなかつたら、あなた方は闇の中に閉じ込められて、罪の中で死んでしまうんだよ」

ということを、ものすごく心配して言われたのに、彼らは気付かないんです。

<sup>22</sup>ユダヤ人ら言う『わが往く処に汝ら来ること能わず』と云えるは、自殺せんとてか<sup>23</sup> イエス言い給う『なんじらは下より出で、我は上より出づ、汝らは此の世より出で、我は此の世より出でず。』」



キリストは天界から下ってきた人ですから、あのヨハネ伝第1章に、

「<sup>11</sup>太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。」(ヨハネ1:1)

とあります。あの「言」は「霊なるキリスト」と置き換えて読んだら、サーツとわかります。霊なるキリストが初めにいらっしやった。父と共にいます。それは神の性質をおびておられた。その方が地界においてきて、受肉して、マリアのお腹に宿って、人として生まれた。

「<sup>12</sup>されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。<sup>13</sup>かかる人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、

ただ、神によりて生まれしなり。」(ヨハネ1:12、13)

と第1章に宣言してあります。そのように、キリストは天から下ってきた方でしょ。だから、

<sup>23</sup>イエス言い給う『なんじらは下より出で、我は上より出づ、汝らは此の世より出で、我は此の世より出でず。』

と。「この世」というのは神に敵対する世ですから。

<sup>24</sup>之によりて我なんじらは己が罪のうちに死なんと云えるなり。汝等もし我の夫なるを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし』<sup>25</sup>彼ら言う『なんじは誰なるか』イエス言い給う『われは正しく汝らに告げ来りし所の者なり。』

「あなた方はこのままでは死んでしまうと、私は言っている。私は、天から下ってきてあなた方を救おうとしてきた。それも自ら来たのではない。遣わされてやって来た」

と。キリストはいつも自分のことを「自分は遣わされて来た」と仰るし、父なる神のことを、「我を遣わし給いし父」という言い方をなさっている。全部、受け身なんです。わが思いでひとつも動いていらっしやらない。そして、

<sup>26</sup>われ汝らに就きて語るべきこと審くべきこと多し、而して我を遣し給いし者は真なり、我は彼に聴きしその事を世に告ぐるなり』(ヨハネ8:23、26)

「私は聞いたとおりのことをそのまま伝達しているだけだ。自分の思い、自分の判断、そんなものは入っていない」

と。これがキリストの一番の強みです。自説をとなえない。学者は自説をとなえます。でも、キリストは自説なるものはない。神さまがすべてなんですから。その神さまを100%、キャッチできたというのがキリストの素晴らしさです。誰もこの世の人はそんなことはできない。どこかでズレます、「啓示を受けた」なんて言いましても。むしろ直接、啓示を受ける人はあぶない。キリストを通して受けないと。キリストは自分をゼロにして投げ出しているから、100%、神さまが宿っているから、

「我を見し者は父を見しなり。私は霊がからっぽだ。霊が貧しい。そうしたら、天国、神の国が私の中にやってきた。私は神の国となった」

と、そういうふうに小池先生は教えてくださった。キリストはからっぽだと。だから、「無者」



という。ナッシング (nothing) です。神の前にナッシング。神さまが彼の中に充滿している。キリストを動かしていた。

我は彼に聴きしその事を世に告ぐるなり。<sup>26</sup>これは父をさして言い給えるを、彼らは悟らざりき。<sup>28</sup>ここにイエス言い給う『なんじら人の子を挙げしの際、十字架にかけてしまったのち、初めて気付くだろう、私がどんな者なのかを。』

我の夫なるを知り、又わが己によりて何事をも為さず、ただ父の我に教え給いしごとく、此等のことを語りたるを知らん。

為した事も語ったことも全部、父の聖旨のままに従っただけということがきつとわかるだろうと。

<sup>29</sup>我を遣し給いし者は、我とともに在す。我つねに御意に適うことを行うに  
よりて、我を独りおき給わず』

これもうらやましい言葉ですね。孔子の言葉に、私はあこがれたんですよ、

「内に省みて疚しからざれば、夫れ何をか憂え何をか懼れん。」(論語 顔淵第十二)

と。うちにやましいことがあるから不安がある。本当にうちが澄みきった無心の境地なら、将来に対しても何に対しても、心配ないはずだという孔子の心境です。

「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」(論語「里仁」)

という。そういう本当のまことです。「これが本ものだ、これに従っていけばもう大丈夫だ」という何かを求めていたんです、本気で。キリストのこの言葉、

「私は常に御意にかなうことを行っているから、絶対に神さまは私を捨てられることはない。いつも一緒にいてくださる」

とこの自信です、確信というか、こういう境地だったら凄い。ところが、我々はそうではない。我々は直接に父なる神とこんな関係になれません。けれども、キリストが私たちを抱きとって、

「あなたと私は一つだよ」

と向こうから言ってくくださるんです、ありがたいことに。

「あなたを既に抱きとった。あなたは、罪はもうない。全部、私が引き受けて片付けた。だから、あなたは無者、無私だ、無罪だよ。あなたはもういない。あなたを新しく生みだした。新しいあなたができています。それを私は導いていくから大丈夫だ。私の懐の中にいつもいるんだよ」

と。これがキリストと私たちとの関係です。それを成らしめてくださるのは聖霊という有り難い助け主です。それが本当のリアリティです。キリストは神さまとご自分の関係でこう仰った。それを我々は羨むことはない。キリストの所にくれば同じ父と御子、御子と私たち、それを一体にしてください。そういう関係が成り立つ。ところがユダヤ人にはそのことがわからない。でも、





<sup>30</sup>此等のことを語り給えるとき、多くの人々イエスを信じたり。と書いてますから、やはり心に響いた人たちが何人かはいた。

<sup>31</sup>ここにイエスを信じたユダヤ人に言いたもう『汝等もし常に我が言に居らば、真にわが弟子なり。』<sup>32</sup>また真理を知らん、而して真理は汝らに自由を得さすべし』(ヨハネ8・19〜32)

この言葉は、私がまた非常に感動する言葉です。キリストの言葉の中にとどまっているなら、「わが言は靈なり生命なり」

と仰いました。言葉と靈的人格キリストとは一如一体ですから、言葉の中にキリストは居たもうし、キリストから流れてくる言葉、それとキリストの靈、キリストの人格、みな一つです。その中に我々自身を投げ入れて、そこに包まれているならば、

「本当にあなたは弟子だ。いや、本当の弟子は私の中にいる。そして真理を知る。」

この真理はあなた方を自由にする。真理を知れば自由になる」

と。誰でも「自由」にあこがれますよ、本当の自由でありたいと。この自由というものは何ものにも代えがたい尊い価値です。「平等」というのは、実現するかしないか、これは条件があります。ところが、自由というのは、誰にでもどんな状況でも、実現しないといけない。しかも、それは本当に内的自由です。たとえば牢獄に繋がれていても、靈は自由に天界を、靈界を翔けめぐる。そういう自由、これを使徒行伝の弟子たちは持っていました。パウロは牢獄に繋がれながら、

「夜遅くパウロとシラスは主を讚美していた。そうしたら、地震が起こって鎖が全部解けた。囚人たちは誰一人逃げなかった」

と書いてある。獄卒は「これは囚人が逃げた」と思つて自害しようとしたら、パウロは「待て、誰も逃げてはおらん」

と。獄卒が明かりをつけて調べてみたら、誰一人逃げていなかった。これが本当のパウロの自由です。パウロは、理由なき、いわれなきことによつて牢獄に繋がれたけれども、そうやって神さまは助けられた。キリストは助けられた。そういう自由です。コルベ神父(1894〜1941 ポーランドのカトリック司祭) もそうです、あのアウシュビッツで犠牲になりました。彼の内面は本当に自由だと思う。

## ●靈の王国

キリストも仰いました、

「<sup>28</sup>身を殺しても、魂を殺し得ぬ者どもを恐れるな。身を殺したのち、魂をゲヘナの地獄の火に投げ入れる権威ある方を、神さまを恐れよ。げにこの方を恐れよ。……<sup>29</sup>二羽の雀は一銭で売られているではないか。あなた方は雀よりもはるかに優れた者だ。<sup>30</sup>あなた方の髪の毛も一筋残らず数えられている。」



31 何も心配するな。お前たちは神に愛されているぞ」(マタイ10・28〜31)

とキリストは言われた。決して「命を絶対保証する」とはどこにも約束しておられない。むしろ、「迫害される」と。弟子たちも最後は殉教しました。けれども、殉教の後に天界で輝いているわけです。だから、地上の命よりも尊いものがある。この世の生よりも尊いものがある。この世の生はしよせん短い。外なる人は滅びていきます。けれども、内なる人、霊は熾さかんにして、成長して輝いていく。これが永遠の御国みくにを受け継ぐ。そこで永遠に生きる。キリストと一緒に、天使たちと一緒に、先に召されていった者たちと一緒に。そういう霊の王国が厳然として存在する。これを聖書は叫んでいる。キリストは叫んでおられます。これを

「然り！ 本当にそうだ！」

と。それは信じ込むのではない。「これ以外はありえない」という、そういう受けとり方。私は「真理」というのはそういうものだと思います。真理自らがそれを受けとる人を、

「なるほど。参りました！」

と言わしめるだけのものだと思います。折伏しやくふくとか信じ込むとか、そんなものではない。

見えない世界ですから、ちよつと困る。皆さんはとまどわれる。でも、見えないものはいっぱいありますでしょ。例えばこの空間にもいっぱい電波が飛びかっている。携帯電話が鳴ります。不思議なことですよ。いっぱい電波が飛び交かっていて、それを受信してキャッチすれば聞こえるわけです。携帯電話がないときでも、テレビのチャンネルを合わせればパツと映ります。そういうものがいっぱい来ている。神さまからの霊波——サタンからの霊波も来ているかも知れません——それを本当にキャッチした人にはそれが入ってくる。そういう見えない世界があり、見える世界は本当に一部なんです。見えないものは永遠界です。見えない世界を本当に、

「然り、これこそリアリティ(實在、現実のもの)だ」

ということを本当に知らしめられたら、もうしめたものです。この鎖とざされた世界を突き抜けますから。無限無量の世界に入りますから。

その点、科学を専門とする人はこの鎖された世界だけで解決しようとする。哲学を専門とする先生方でも、鎖された世界だけで解決しようとなさるから、私は残念だと思う。無前提、何にも囚とらわれない。無前提でそのまま受けとる。「本ものか、偽にせものか」を見分ける能力を誰もが持っている。欲があつたらだめです。欲があつたり、下心があつたら、だまされます。けれども、本当に

「御意みこころにかかないたい」

という純なる思いで受ければ、「語られているものが本当か、それとも偽いつわりか」ということが判断できるはずだと思う。そういう見分け方をするしかないんですけれども。結局、

「私を信用してくださいませんか？」



ということになってくる。キリストでさえ信用されてないんだから、しょうがないな、私は信用してもらえなくても(笑)。

「<sup>33</sup>かれら答う『われはアブラハムの裔にして、未だ人の奴隷となりし事なし。如何なれば「なんじら自由を得べし」と言うか』<sup>34</sup>イエス答え給う『まことに誠に汝らに告ぐ、すべて罪を犯す者は罪の奴隷なり。<sup>35</sup>奴隷はとこしえに家に居らず、子は永遠に居るなり。彼らは何と言っているかという』と、

『真理があなた方に自由を得させる』とは何か!? 私たちはもともと自由ですよ、奴隷になったことは一度もありません』

と彼らは食い下がっている。けれども、キリストは言われた、

「罪を犯す者は罪の奴隷である。罪の中にいる者は実は奴隷である。気付かずして奴隷である。早くそこから解き放されないといけない。その自由は私が与える。私が解き放つと、あなた方は本当に自由になる」

と。親切で仰っているのに全然彼らには通じない。ここでは自分のことを「子」と仰っている。

<sup>36</sup>この故に子もし汝らに自由を得させば、汝ら実に自由とならん。<sup>37</sup>我は汝らがアブラハムの裔なるを知る、されど我が言なんじらの衷に留らぬ故に、我を殺さんと謀る。(ヨハネ8・33〜37)

それが証拠に私を殺そうとしているではないか。本当にアブラハムの子だったら、そんな殺そうなんてしないと。彼らはアブラハムの子孫だということをすごく誇りにしていた。アブラハムは神に祝福を与えられて、

「子孫末代までこの祝福は及ぶ」

と神は約束されたから、それをたてにとつて「自分たちはアブラハムの裔だ」と言っているけれども、キリストは承知なさらない。

「アブラハムの裔だったら、どうして私を殺そうと謀るのか。神から聞いた真理を語っている私を殺そうと謀る。私の言葉を聞けない。それは結局、あなた方が神から出ていない。元は神から出たかもしれないけれども、今はそうではない。別人種になってしまったからではないか?」

と言っておられる。「ああ、そうでした」と気付いてくれたらよかったのに、最後まで抵抗している。それで、しょうがないですね、この問答は。キリストもきついことを仰いました。

44節に、

「<sup>44</sup>汝らは己が父悪魔より出でて、己が父の慾を行わんことを望む。彼は最初より人殺なり、

サタンというのはそういう輩です。私は、人間はサタンから出たとは思いません。人間は



みな神の子だったんだ、本来。ところが、足をすくわれて、いつのまにかサタンの手下になって気付かずにいるという。これが不幸ですよ。変な宗教だったら、そういうことがある、まま起こります。主観的には自分は善をなしていると思いつながら、やっていることはとんでもないことをやっている。しかも、気付かない。そういうことに早く目が覚めなければと、私は思う。

47 神より出づる者は神の言をきく、汝らの聴かぬは神より出でぬに因る』…

…50 我はおのれの栄光を求めず、之を求めかつ審判し給う者あり。51 誠にま

ことに汝らに告ぐ、人もし我が言を守らば、永遠に死を見ざるべし』(ヨハネ

8・44~51)

そんなですよ。本当にキリストの言葉の中にとどまり、キリストの生命をわが生命とさせていただいて、キリストと一つにさせられてしまったら、もう死というものはどこかへ行ってしまう。肉体は滅びます。けれども、内なる霊なる人、これはますます熾んに末広がり成長していつて、やがてキリストと同じ姿に化せられる。これが私たちにされた約束なんです。これは神さまがなさる、キリストがなさる御業なんです。ヨハネ伝14章を私は引きましたけれども、14章にはつきりそのことを約束しておられる。15章もそうです。

「私は葡萄の樹で、あなたたちは枝だ。枝が樹に繋がっていれば、ひとりでに実を結ぶ。枝が一人立ちして独立して、私から離れたら、枯れてしまう。私にくっついていたら、ひとりでに実を結ぶ。あなたたちと私は一つだ。あなたたちが実を結べば、神は喜んでくださる。あなたたちは喜ばれる存在だ」

と言われた。そして、14章では、

「あなたたちは私以上の業をするようになる。私が父のもとに行くからだ。そして、聖霊という姿になって、あなたたちの中に帰ってくる。そうすると、

私が果たし得なかったことまで、あなた方はやる」

と。つまり、天界のキリストが私たちの所へ聖霊となって戻ってきて、私たちに乗り移って、共存して、内に宿ってくださいって、キリストの御業を更に押し進めていってください。それがどういう御業かというと、この地上に霊の王国を築くという業です。組織ではない。一人ひとりの体の中に、心の中に、霊の王国を築き上げる。一人ひとりが神の人に変えられていく、そういう御業なんです。

### ● 一番単純な道

政治でもなければ社会運動でもない。組織でもない。一人ひとりである。あの宇宙を超えた、宇宙の創造主でありたもう、想像を絶するような広大無辺なる神、つかみどころのない神、その方がキリストという個に宿り、そしてそのキリストは一人ひとりの人間の中に宿ろう



としている。まさに「インディビデュアル」(individual)個々、個人「個」なんです。全体ではない。一人ひとりを生かさずにはおかないという。だから、キリストは野の花を見て——  
芭蕉は董すみれでした、

「山路やまじきてなにやらゆかしすみれ草」

と言いました。人の目に目立たないで咲いている董に目をとめた——キリストは、ひとしれず咲いている野の花に目をとめて、

「この花の栄えはあのソロモンの栄華よりも素晴らしい」

と言われた。そのように、キリストは本当に名もなき一人ひとりを大事にされた。その一人ひとりを素晴らしい姿に変えずにおかない。そういうキリストの熱愛、それが今も来ているわけです。

それを本気で受けとる人を捜し求めておられる。求人しておられるんだけど、あまり応えない。この世は就職難で職を求めているのに、求人がこない。キリストは天界から天使たちを遣わしている。求人なさっているけれども、みんなそっぽを見ていて、テレビばかり、マンガばかり見て、この世のことばかり求めて、実に浅薄な魂になってしまった。道徳はないし、永遠の価値なんか、そんなものはクソクラエという態度になりました。銭勘定ばかりで、金持ちがえらくなりました。実に浅薄な社会になりました。

だから、ここで本当に、教育の根底は一人ひとりが神の子だという自覚を持っていたことだと。それはその人が偉いからでなくて、キリストがその人の中に宿ってその人を神の子にするということ。これは神の御意みこころなんだからしょうがない。我々が「やめろ」と言ったら、神さまはやめない。ただ、妨げる人の所には神さまは働かない。それは我々の自由を重んじてくださるから。聖霊というのは本当に我々の自由を重んじて、おずおずと我々の中に忍び込んでこられる方です。だから、

「聖霊なる主さま、来てください!」

と言って懇願しないと、おいでくださらない。強盗のように押し入らないですよ。そんな方ではない。本当に心から、「お願いします!」という気持ちで心の扉を開いたらいい。キリストはあなたが心の戸を閉じていたら、

「あなたの胸の扉を叩いている。扉を開いてくれたら、一緒にご馳走を食べようよ」

と黙示録にあります。そういうお方です。何一つご自身に対して相手からお求めにならない。無償の愛、本当に無償の愛です。それを何かこれと引き替えができるかと思うのが、人間の浅はかさです。

「善行しました、こんな事業をやりました。だから、私は天国へ行けるでしょう」

なんて、そうじゃない。

「あなたをあなたなるが故ゆえに私は愛する。あなたを愛するが故にあなたを受け入れる」

と。そんなふうに、人の価値ではなくて、別の尺度で言われたら、一生懸命に努力してきた人は何か、立つ瀬がないんですね。

「私がこんなに頑張ってきたのにこれは何だったんですか？あまりにも不平等ではないですか？あんなサボリとこんなマジメな人間をあなたは一緒にされるんですか!?」

と。朝早くから働いた人と夕方5時にやっと仕事にありついた人と、最後に一デナリずつ払った。朝早くから汗水たらして長時間働いた人にもやはり一デナリを払ったら文句を言った。それに対して、

「一デナリの約束だよ。誰にも等しくしてやりたい。いろんな事情があつて、サタンに妨げられて来れなかったんだろう。よく気付いて来てくれた。さあ最良のものを受けとりたまえ」

と。涼しい顔してますよね、あの主人は。朝早くから働いていたら、朝早くから神の国で働けたということ幸せだと思わないといかん。やっと夕方5時になってそこへ入って行ったというのは可哀相なんだ。そう思わないといかんのに、

「こんなしんどい目をしてきた私と、あんなちよつとしか働かない人と同じにして、神さま、あなたはそれでも平等の神さまですか!？」

と。これが人間の浅ましきですな。

いや、こういうキリストの、天界の次元というものが家庭に入りこんだら、家庭は変わりますよ。我々はなんとつまらんことで、お互いにブツブツ言っているかということですか、自分を正しいとしているかと。私なんかは偉そうに言えない。東京にいる時は、奥さんがきたら拜んでいましたけれども、京都へ帰れば、ついつい妻に対して小言を言ったり、文句を言ったりしますから、「申し訳ありません」という感じですけども(笑)。人間はどこまでもしようがないという、

「そのありのままの姿で、あなたのあるがままの姿で、受け入れているよ」

というのが、キリストの無条件の愛です。つまり、無条件、絶対。相手の姿、形によって左右されないというのが絶対ということ、無条件ということ、条件をつけない。

「空気がそれだよ」

と小池先生は言われた。そういう無条件絶対の愛というのはあまりにも有り難くて、

「そんなことがこの世にありえましようか？そんなものは眉唾まゆつばものでしょう」

というのが人の思いです。そんなすごいものなら百万円でも足らんのに。ところが、無代価だという。つまり、お金に代えられないくらいに尊いということ。もつと言えばキリストは、

「あなた自身をいただきます。あなた自身を差し出しなさい。あなたはもう自分のものではない。私のものだ。私があなただを導いて、素晴らしいものに仕上げる。



いいですね」

という契約なんです。キリストが血でもって立ててくださった契約です。それを受けとって、「なんの不平不満ありません」と言う。

「なんの不平不満ありません」

と言える人はやはり自分に愛想をつかした人です。

「いや、私は立派だ、私はまだまだ野心がある、私はこれだけのことをやってから」

と思っている人は、なかなかキリストのところへ来れない。そのまま自分を認めた上で、その上で「天国をください」という。

そのことについて、キリストは「オール・オア・ナッシング」(all or nothing 全か無か)の方です。投げ出したら、今度はキリストがどんどんくださる。

「あなたは事業をやれ。もはや、あなたの欲でやらない事業だから、応援するよ。

人を幸いにする事業をやれ。あなたに智慧をやる。資金も出してやるよ」

と。キリストから資金がこなくても、誰かを通して資金がいく。そういう、神さまの経済学、神さまのこの世を動かす法則が働く。これの味をしめたら、何も心配はいらん。

「明日のことを思い煩うなかれ」

と。これも実験してみないとしょうがない、生活をかけて本当に。

「神を試みるなかれ」

と言いますから、試みてはいけませんけれども、切羽詰まって、

「神さま、あなたが真まことなるお方であるから、私は従います」

と。「まこと」というのは偽らないという、ウソがないということ。言のとおりまことに成るまことということでしょう。そのものに従って行く、一番単純な道なんです。己を惜しんでいたら行けない。私みたいに、何も失うものがない人間は喜んで行くわけです。喜んで行ったら、素晴らしい世界が開けて、その上で私はこの世的にも、さっき言いましたように、素晴らしい生活をさせてもらいました、3年半。夢の国でしたよ、今から思えば。その時は、「しんどい、しんどい」と言っていたけれども、今から思えば夢の国の3年半でした。

### ●真理は汝を自由にする

そういうことで、

「キリストの世界に入ったら、何か人間が狭くなる。何か人を差別する。何か宗教的に偏狭になる」

とか、それは全部、偽りです。太陽の光は無色透明の光で、一切を照らし、包んでいます。何の差別もない。天界に国境なんてありませんよ。我々の世界は、海は何海里の支配的経済水域とか言うし、空はまた排他的な空中権があつて、そこへよその国の飛行機が飛んできたら、領空侵犯だとか言いますけれども、神さまの世界は、霊の王国は一切そういうこ



とはない。光が輝いている世界ですから。

詩篇19篇のところにも、

「「もろもろの天は神の栄光をあらわし穹蒼はその手のわざをしめす」という素晴らしい詩があります。

「この日ことをかの日につたえこのよ知識をかの夜におくる。語らずいわずその声きこえざるに」<sup>4</sup> そのひびきは全地にあまねくそのことばは地のほてにまでおよぶ

神さまの生命の言ことばというものは全地に響き渡っている。チャンネルを合わせれば聞こえる。チャンネルを閉じているから聞こえないだけで全地に徧あまねっている。そして、太陽のことを歌って、

神はかしこに帷幄を日のためにもうけたまえり<sup>5</sup> 日は新婚が祝いの殿をいつるごとく勇士がきそいはしるをよろこぶに似たり<sup>6</sup>。そのいでたつや天の涯よりしその運びゆくや天のはてにいたる物としてそのあたたまりをこうぶらざるはなし」(詩篇19・1〜6)

つまり、万物を照らし民を生かしているということがちゃんとして旧約聖書の詩篇19篇に出ている。

イスラエルの民というのは自然を友としていた。ヨーロッパの自然科学については、何か西洋文明が自然を征服したとか、自然と敵対関係にあるとか言われます。東洋の考え方は、自然の中に溶け込んで一如になる。「西洋はだめだ」と、よく皆さんは仰います。でも、イスラエルを見たら——あれは東洋なのかも知れませんが——全然、自然と対立していない。自然の中に神の栄光を見て、その中に溶け込んでいる。キリスト自身が自然を讃美しておられます。だから、私たちは、いわゆる賢い人の言うことに惑わされなくて、自分の目で見て、味わい、体験し、そして真理を告白していく。真理はあなたを自由にするからです。

フライブルク大学という所に私は留学していた。1978年から1979年にかけて。フライブルク大学の大讲堂がありました、その外壁に金文字で、

“Die Wahrheit macht euch frei.”

「真理は汝らを自由にする」

と、それがバートと金文字で書かれていた。太陽の光でキラキラと輝いていた。もちろん、大学は真理を追求する所ですから、その「真理」というのは学問的な意味で言われているのでしょうけれども。やはりヨーロッパでは、神学から学問が始まって、いろいろ哲学、医学、法学と広まっていったから、向こうは学問と宗教、キリスト教の世界と学問は対立しないと思っっている。

「あなた方は学問すれば自由になるんですよ」





と、新入生にとってはおうれしい言葉です。ところが、実はやっているうちにだんだん受験勉強ばかりやって、苦しくなるんでしょうけれども。フライブルク大学の外壁の金文字を見て打たれました。「真理はあなた方を自由にする」と。その真理は何かというと、キリストこそが真理の権化ごんげということでした。彼自身が真理まことなんです。「何を言った、これを為した」というよりも、存在そのものが真理です。流れてくる言葉、祈りも、業わざも全部、真理なんです。それが生命に満ちている。愛に満ちている。本ものなんです。だから、

「我は道なり、真理まことなり、生命いのちなり」

と仰った。まことに自然なことを言われた。

「私を通らなければ、あなた方は父の御許みもとに行けないよ」

と。それはそうでしょ、あのユダヤの社会で他の宗教ではだめですから。それまでは戒律宗教です。モーセの十誡です。律法を守って御許に行こうとしているのに対してキリストは、「そうじゃない。私だよ。律法おきてではないよ」

と。キリスト教でもなお戒律に縛られているキリスト教がまだまだ世の中にはある。

「キリストは十字架でああなたの罪を赦された。これからは戒律を守り善い子になりなさい」

と。これであつたら、どうにもならん。偽善者になつてしまふ。人にいい格好して見せないとならん、「あの人が見ているから」なんて(笑)。タバコ吸っていたのが、タバコを消して捨てたりとか。そういうことを最もキリストは嫌われたでしょ、偽善ということだね。キリストは、「あるがままでいい」と仰つたんです。

「まつとうな人間に仕立て上げるのが私の役目だ。戒律から解き放たれて、本当に自由の世界に解き放たれて羽ばたけ。羽ばたく原動力は聖霊だよ」

と。聖霊という霊が来なければ羽ばたけない。これはやはり、祈りが必要になってきます。本当にキリストの十字架に打たれて、

「ありがとうございます。主さま、あなたと一つなる生活をさせてください。聖霊をください。本当にあなたと一つにさせてください」

と祈る。そうしたら、

「聖霊をやるよ」

というのが約束ですよ。ヨハネ伝14章をご覧ください。これは弟子たちとキリストの別れの挨拶の言葉です。キリストは弟子たちと一つになる。

「あなたたちと私とは一つだ。父と私とあなた方は一つだ。私が居る所にあなたちも居る。私は助け主、聖霊を遣わす。この世の人は聖霊を知らない。けれども、この聖霊というお方はあなた方の中に内住する。そのお方が内住したら、その方はキリストの栄光を、父なる神の栄光を示す。いつも一緒に居る。そして、平安がやってくる。平安を遣わす」



そういうことが言われています。

●聖霊をいただく、どんなことになるか

さっきの太陽のことで、キリストの山上の垂訓にも出てきます。

「<sup>45</sup>……天の父はその日を悪き者の上にも善き者の上にも昇らせ、雨を正しき者にも正しからぬ者にも降らせ給うなり。……<sup>47</sup>兄弟にのみ挨拶すとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあらざや。<sup>48</sup>然らば、汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ」(マタイ5・45〜48)

と。その前には、

「<sup>44</sup>……汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。<sup>45</sup>これ天にいます汝らの父の子とならん為なり」(マタイ5・44〜45)

という。聖霊を私たちは無条件にいただける。これも無条件です。十字架の贖いも無条件ですし、聖霊も無条件です。十字架で贖われて真空状態になったら、聖霊がもうたちどころに来てくださる。これは段階的ではない。即なんです。真空にされたところへ聖霊は来ないわけにいかない。逆に言うと、今まで自分という、自我というものが邪魔をして、神さまの霊が入らない。塞いでいた。それがとっぱらわれたら、サツと流れてくる。実に単純な理であります。だから、私たちは「主さま!」と祈ります、もう自然に「主さま、イエスさま!」と。「主さま!」と祈れるということが、聖霊のみ助けの結果ですよ。親鸞も言いましたね、

「弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏まうさんとおもひたつころのをこるとき、すなはち撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり。」

と。すごい。こんなエゴイストな人間が、

「南無阿弥陀仏!」

と称えようなんていう殊勝な心を起こすということ自体がもう弥陀の本願の作用だと言う。

だから、皆さまが、こうしてこの講演会に来ようとなさったのは、お気づきにならなくとも、神さまのもの凄い働きですよ、神さまの霊の。当然、敵対勢力が働いていたと思う。それを乗り越えて、皆さんはおいでになった。絶対に皆さんは私の語っていることを、

「然り! はい」

としてお受けになったら、変貌されます。「ノー!」と言われたらそれまでです。私は詐欺師ではありませんよ(笑)。本ものを言うだけです。一銭たりとも「お金を出せ」とは絶対に言いませんからね。でも、本当の本当なんです。そういう単純な世界。単純明瞭な、本当に澄みとおった世界なんです。誰でもがいただける世界。そういう世界に神さまが皆さんをご招待なさっているという、このことに気付いてほしい。あまりにもありがたすぎて、



「そんなことはあるまい。もつともつと修行しないと、もつともつと賢くならなくては」

と、条件を付けたがるわけですね。条件は要りません。幼児は条件を付けない。

「おさなご幼児の如くならずば、神の国を受けることあたわず、神の国に入ることあた

わず」

と言われました。本当にそうです。

聖霊をいただく、聖霊が来てくださると、どんなことになるか。まず、人間は謙虚になります。自らは何もできない。プラス(善きこと)は全部、神さまの恵み。そういうふう謙虚に受けとれるようになります。言い換えれば、砕けの魂ということ。己を立てないという姿にひとりになります。キリストを一切とする生き方が自然に出てくる。キリストを喜ぶという生き方が自然に出てきます。それから、平安に支配されます。憂いが消えます。心配事がなくなります。内なる喜びが出てきます。人に対して優しくなります。人が愛おしくなります。

「どの人もこの人も神さまに愛されている。本当に神さまの子供だ。キリストが愛していらつしやる方々だ」

と思うと、それは人が愛おしくなります。年齢のなせるわざでしょうね、もう70歳になりますと、先が短いと思えますと、この世に居る人が一人ひとり愛おしくてならない。秘書官であつても事務の女性であつても、みんなとおしくしてしょうがない。だから、私を父のように慕ってくれたりする。そういう本当の信愛関係ができてきます。本当の愛の関係、それが出てきます。それから、御国みくにが慕わしい。御国がリアリテイですから、御国の一旦が自分のうちに来ているというような、何かそういう思いになります。主キリストに使われて、愛されているという自覚。主キリストは絶対に私を捨てない。

「どんなに多くの人があなたを非難しても、私は捨てない。私はあなたの味方だ。大丈夫だよ。それでいいね」

「はい、あなたがいらつしやれば、もう千人力です」

と。そういう内的な一つの確信というものが来ますね、愛されているという自覚が。「何があつても大丈夫だ」という安心感。一言でいえば、

「キリストが私を喜んでいてくださる」ということ。だから、私もキリストを喜ぶ。

イエスは伝道の始めにヨルダン川で洗礼を受けました。みんなヨハネの洗礼の所に連れて来られて、そこで続々と洗礼を受けた。ヨハネは、

「お前ら、悔い改めなかつたら、そのうちに凄い審判さばきがやってくるぞ。天から火が降ってくるぞ。後あとからキリストという方がやってくる。火をもつて審さばく方だ」



と言って洗礼をやっている。みな来ます。その時キリストも来られた。ヨハネはびつくりして、

「あなたからバプテスマを受けるのは私であって、あなたはそんな方ではありません」

と言ったけれどもキリストはヨルダン川に身を沈められて——ヨルダン川というのは地球上で一番低い川だそうです——その一番深みへ自分の身を沈められた。小池先生はそのことを、

「キリストは自分では何一つ悔い改めを必要としないお方であった。けれども、我々の不完全な悔い改めを背負って、自ら我々に代わって本当の悔い改めをヨルダン川の底辺でやってくださった。だから、水から上がられた時に天が開けて、天から声があつた。聖霊がくださった。『これはわが愛しむ子、われ汝を悦ぶ』という御声が聞こえてきた」

と仰った。それからもう一回、山上で変貌された時にもその御声が聞こえてきた。そういうふうには、イエスは神さまから本当に愛された、特愛の子だった。

「われ汝を悦ぶ、汝はわが心にかなう者、われ汝を愛しむ」

という、そういう蜜月関係が生じた。今度は、キリストが私に向かって同じことを言うてくださる、「われ汝を悦ぶ」と。これは涙が出るほどありがたいことです。

「あなたを捨てない。あなたのことは私が責任を持つ。あなたのことも家族のことも集会のこと、全部、私が責任を持つ。あなたは、私が語れというとお話し語れ。」

聖書を読んで感動したら、そのまま語れ」と。私は京都に帰ります時に新幹線の中で聖書を読んで、インスピレーションみたいな何か、「ああ、これは素晴らしいな」と思ったことを日曜日に語る。それでまた夕方、東京へ帰ってくる。もう聖書の勉強なんかする時間はありません。註解書も何も読まない。聖書だけ。それから旧約聖書の後半部——もうボロボロですよ——イザヤ書や何やらを持って、それから新約聖書と。

「これだけが私の生命だよ」

と。これでそのまま水を割らないで語りますと、集つて来た人がみんな、

「何か、今日の話は私個人に語られたように思っています」

なんて言い出す。

「いや、実は私はこんな問題をかかえて今日来たんですけれども、見事な答えをいいただきました」

「はあ、そう、よかったね」

と。そんなふうで今までやってきました。ですから、私はこれからもそうありたいと思う。こうやって、キリストの言葉が本当に現実味をおびてくる。

## ●神の国は一人ひとりの中に宿る

そして、私は思うんです。あの新約聖書はイスラエルという我々からはるか遠いところで、二千年前の時代に演じられたドラマです、言うならば。キリストとその周りの人たち、弟子たち、キリストを慕う人たち、それから敵対者です、宗教的な敵対者。その間で取り交わされた空中戦みたなものです。そういうドラマです。キリストは神の言葉を語り、御業をなし、ラザロを甦らされた。そういう凄いドラマが展開しました。それは過ぎ去った歴史的に一回きり起こったことですが、それがまるで立体化して、そこから飛び出て、今に迫ってくるんですよ、本当に。

皆さんも、きつとそうだと思います。聖書をお読みになりますね。

「これはイスラエルのああいう所で、順序はこうで……」

と、そんなことに囚われて読むのは絶対だめ。そうではなくて、あそこで語られたことはまるでシンボル(象徴)の如く、あるいは生き物となつて、今も現代にスーツとおりてきて、時代の制約を乗り越えて、今も普遍的な真理として妥当し、今も生き生きと我々に迫ってくる。それだけをいただければいい。何もユダヤ人になる必要はない。モーセの弟子になる必要はない。何も洗礼を受ける必要もない。本当にキリストの生命を受けとることです。

## 「わが言は靈なり生命なり」

と、それを「はいっ」と言つて受けとる。単純率直に。それで、「われ汝を悦ぶ」、「はい、ありがとうございます」と。そうやっていっていると、聖書が生き返つて迫ってきます。使徒たち、パウロ、ヨハネ、ペテロの言葉に対してはみな、

「はい、そうです、そうです。それ以外にないですね!」

という気持ちになります。私は受験勉強する学生に、

「あなた方はいつまでも受験生ではいかん。試験委員になりなさい。つまり、試験委員ならどんな問題を出すか、立場を変えて、そこから見なさい。下から上を見ているのではなく、上から見たら、勉強すべきことがわかるよ」

と言ったことがある。私は聖書でキリストがどう言っているか、自分もキリストと一緒に聖書を見る。キリストが語られていることを、自分も一緒に語っていると思つて読みます。

「はい、そうです、そうです。主さま、そうです。そうでしかありませんよ!」  
と。こういう読み方ができる。そうしたら楽しいですよ。「これはこう解釈すべきであろうか、こことあそこでは矛盾するだろうか?」なんて、そんなものに囚われていたら全然だめです。そういう靈なるキリストと自分とが一緒になつて、この福音書を読んでいると、

「そうだよ、そうだよ、これ以外にはないよ。ああ凄いね、これは」

と、そういう読み方になる。まさに、

「わが言は靈なり、生命なり。人を生かすものは靈なり、肉は何の役にも立たない」



という言葉は本当にそうです。

「ああそうだな。現実だな、まことにリアルだな」

ということ、聖書が生き返って迫ってきます。

そういうことで、本当に日本からキリスト教の革命を起こしましょう、一人ひとりから。神の国は一人びとりの中に宿ります。繰り返し申しますと、組織でもない、全体主義でもない、制度でもない。神の国は一人ひとりの中に宿る。キリストの生命が宿る。それが大きくなって枝わかれして、潤って泉となって溢れ出て行く。そこに築かれた見えざる霊の王国、これが私は神の国だと思う。それは誰もつぶすことができません。それは直ちに霊界と直結しております。そして時々、天使たちが来てくれるかもしれない。キリストが霊身を現わしてくださるかもしれない。そうなったらもう万々歳です。そういうことを思うとわくわくします。

「あの人が高裁判所の判事だったのか？」

なんて、皆さん、思うでしょ。高裁判所の判事として、私はきちんと仕事をしました。絶対、手を抜きませんでした。それだけは信じてください。けれども、私が本当に目指したい世界はこれから始まります。学生たちにも、市井しせいの人たちにも、どんな人にも、私は自分を告白していきたいと思っております。長々としやべりましたけれども、これで終わらせていただきます。

